

不況と戦争の時代（1931～1945）その4

《1931年、ガス橋完成》

1931年（昭和6）9月、多摩川にガス橋が完成します。ガスは、最初、街路灯の燃料として、石炭を熱して作られたのですが、大正時代になると、ガスは、調理・暖房用燃料へと変化し需要が拡大していきます。

東京府から払い下げられた東京ガスは、中小ガス会社を吸収していき、関東大震災の翌年には、川崎ガスを吸収して、京浜臨海部の安善町（横浜市鶴見区）に鶴見製造所を建設しました。

このガスを東京へ運ぶため、ガス橋が建設されました。ガスの維持管理用の通路は、地元要望により一般人も通行できるようになりました。

一方、同年同月に、満州事変が勃発しています。この時点において、東京ガスは、8年後に政府からガス消費に制限がかけられるとは思ってもいなかったことでしょう。

経済不況や満州事変と、社会に暗雲が立ち込めるなか、喜劇王チャップリンが来日します。そのとき何が起きたか、次回をお楽しみに。

なお、現在のガス橋は、1960年（昭和35）に、ガス管が添加された道路橋として架け替えられたもので、都道・県道111号線（大田神奈川線）となっています。

写真は、①当時のガス橋（「写真が語る沿線」（岩田忠利編集）HP掲載写真）、②現在のガス橋（細見撮影）、③東京ガス鶴見製造所のガス溜（「復興建築の世界」HP掲載写真）

①



②



③

